

妻に叱られて②4

「集団検診で叱られたこと」

土居 修

土居 修



「嘘と坊主の頭はいうかたない。」

このままでいいわ

たことがない」と公言するときに、「いう」は掛詞となる。同音異義語で「言う」と「結う」のふたつの意味をもたせる修辭法である。だが、それはさておき、私はこのように生きてきた。これからも生きてゆく。妻に叱られる日常だが、男の美学は譲れない。

六甲風ならぬ葉山風に震えながら、受付を済まして胸部レントゲンを撮る。検診車から降りると、検○コップを渡された。奥のトイレで気張るしかない。最近妙に勢いがいいよとせつなく思う。潔さもな。かつては見事に切れていた。

妻の今日のブラジャーを思い浮かべた。パステルカラーであったか、モスグリーンであったか。ともかく、背中が離れ離れになっていくホックにそこはかとない哀愁を覚えた。妻のそれがAカップであることは全く無関係の思念であつた。

須崎市の集団検診は、5月10日を皮切りに計13回行われる。最終回である12月13日に妻と受診をした(経緯)を綴りたい。(顛末)ではないことを謝しながら。

悲嘆にくれながら提出。殺風景な廊下に並べられたパイプ椅子に悄然とうすまうていると、遅れて妻がやってきた。表情が硬い。「どうしたか」と尋ねた。

愛した女性の胸が小さかった偶然性を今さき悔やむことは、男の美学ではない。なにゆえの哀愁であつたのか。来し方を振り返っている、呼ばれて返つていくと、廊下の脇の空間に簡易に設置されたカーテンをくぐると、40歳後半に見える女性がいた。

「あなたを受けないなら、私も受けない」最後の段階で妻に通告する。師走の恒例と違ってよい。熟女とは、と考える。ときに厄介な存在、骨が折れてし

「やっちゃおか」「あとちょっとだから、半と見える女性がいた。」

「お年を召されると、みなさん低くなりますから」物柔らかかに語る彼女に癒されながら、そうなんですかと元氣よく答えた記憶。

「身長が縮むのは、重力も関係しているんですよ」と続けて、彼女は「へえー。重力が」「そうなんです。だから、気にすることはありません」

「私だけに強い重力がかかっているんじゃないですか」「そんなことはない、と思いますよ」

「高かったですか」「高いですわ」「高いですわ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」

「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

「ぼか。みんな、笑っているじゃないのよ」

「もう、恥ずかしいんだから」

「どうして、あなたが恥ずかしいのよ」



「おへそが見えるようにしてください」

「もう何年も、へそはごまはとつてませんよ」

「大丈夫です、おへそは関係ありませんから」

初対面の人との会話を存分に楽しみたい。前期高齢者の戯言では、決してない。続いて、血圧測定。そこはかとない色気を醸し出す女性が機器を装着する。二十歳前半か。マッシュミディの茶色が艶めかしい。「トントントトトトト…」という激しい動悸を覚えていた。「高いですわ」「高いですわ」彼女とのやりとりも綴りたいが、やはり、体重測定時と同じく割愛するしかない。私に与えられている字数が恨めしい。無念、無念。すべてを終えて、廊下に出てきた私を妻がふたたび叱る。「どうして、そんなに時間がかかるのよ、まったく」弁解はしなかった。ただ、離れ離れのブラジャーのホックは、のうがわるいんだらうかとそのことが気になった。「したが」「だから。まだ、してないって」二〇二二年が終わろうとしていた。振り返れば、激動の一年であった。